

SNS novels.

ST

1. お茶にしましょう ○ 8
2. ひまわりさん（百合 ← 池） 10
3. グラスオフ ● 14
4. 朝寝 ● 18
5. 華筆りと海、鼻先の探り合い ○ 21
6. 琥珀の氷河、溶かしながら手引く ○ 26
7. ばら撒かれる裏切りの銀貨、神の磔刑 ○ 29
8. 神のあまやかな不平等、創造主の画策 ○ 33
9. とある僕っ娘の膝枕探訪 / 前編 ○● 38
10. とある僕っ娘の膝枕探訪 / 中編 ○●+紫翠 50
11. とある僕っ娘の膝枕探訪 / 後編 ○ 61
12. 表参道26時 ● 72
13. 赤の前夜、つまらない天才は食卓の夢をみる ○ 77
14. 白の前夜、完璧主義者は冷蔵庫に愛を収める ○ 82
15. gibier ● 87
16. わびすけ / 前編 ● 97
17. わびすけ / 後編 ● 107
18. ベルベット・ブリザード:Day ● 116
19. ベルベット・ブリザード:Night ● 124
20. さくらもみじ ● 132
21. 朽ち葉 ○ 143
22. 口実 ● 150
23. 口実のそのあとで、 ● 160
24. SSログ ○● 164

self published novels.

1. 315.569.260 ○● 170
2. 36 1/2（アンソロ寄稿） ● 220
3. よいこののろい（悪魔と神父パロ） ○● 238

華毫りと海、鼻先の探り合い

(赤白赤 初出・2014/9/26)

〔二週間前・赤城宅〕

「うわっ」

捜査用の白手袋が、百合根の頬へ強かにぶつけられる。

とはいっても、毛羽立ちのないように表面加工されたそれは大した痛みも与えることなく、リノリウムの床に力なく落ちて。

「ちよつと……いきなり何するんです！ 現場でもないのに手袋なんか持ち出して」

百合根は困惑しながらも持ち前の几帳面さで素早くそれらを拾い集め、洗濯した靴下を畳むときよろしく丸め込み、眼前の男へ手を伸べた。

「ほらっ、商売道具なんですから」

今しがた自らが放った手袋が瞬時に返って来て、受け取る男の口元には堪え切れない笑みが滲む。

全て計画通りだ。

「……よし、お前の意思はしかと受け取った。これで成立だ」「え、何がです？」

「何がって決闘だ、お前手袋拾っただろう」

「血糖……？ なら正常値で、」

「勝手に胡麻麦茶でも飲んでろバカキヤツプ」

「……全く意味が解らないんですけど」

やばい、何かイカン流れに巻き込まれた気がする。

百合根の勘はこういうときだけ冴え渡ってしまうのが常で、ほぼ100%間違いない当たってしまうのも常だ。

ソファに腰掛けた百合根の傍らに立っていた男は弾かれたように飛び掛かり上司の身体へ覆い被さると、若干退き気味の白い顔に向かって唾を飛ばさん勢いで畳み掛けた。

『決闘』！ 二人の人間がある定められた条件のもと命を掛けて戦う行為のこと！ つまり果し合いだキヤツプ」

「ちよちよちよちよ赤城さん……俺たちって今、そんな物騒な話してましたっけ……？」

「そうならざるを得ない状況に持ち込んだのはお前だろうキヤツプ、こうなるまで俺はあらゆる状況でお前に選択の余地を与えた。護歩できるところは最大限護歩したつもりだ。しかしお前は一向にそれに応えない、だから最終手段として決闘と云う明確に勝敗がつく方法で俺はお前に問うより他ない……文字通り雌雄を決しよう、キヤツプ」

一息で捲し立てる赤城の剣幕に完全に気圧され押し黙る百合根の視線だけがぐるぐると動き回る。しかし半ば押し倒さ

進水式

年季の入ったデスクの引き出しは、ガタガタと喚く。現れたのは必要最低限の文具。その中から使い慣れた万年筆を取り出すと、男はきゅつとキャップを捻った。真つ白な便箋に左手を添えてトン、と紙面に燻し銀のペン先を落とす。上質なコットンペーパーは動かないペン先を受け止めて、数分に及ぶ男の長考をもつてもカーボンブラックのインクを滲ませず保った。意を決した様に滑り出す描線は、少し癖のある角張った文字を紡ぎだす。その書き出しは、彼らしい素っ気無い一行だった。

『残念ながら全てはもう決まったことだ。STを解散する。』

反論は聞かない』

非番の朝、身支度を整えデスクに向かい数時間、最後の一通を書き終えた男が窓の外を見れば世界はとうに薄暮れていて、自分ひとりだけが取り残された気持ちになる。デスクライトを点け、はたと向き直れば自らを襲う猛烈な空腹に、水滴摂らずにいたのを思い出した。しかし男は手を止めず、丁寧に書き終えた便箋をふたつに折ると、傍らに置いてあった封筒へ。青・黒・緑・黄、そして若草色……色鮮やかな五枚の封筒に各人への思いを馳せながら、封緘する。灯した蠟

燭で真つ赤な封蝋を炙り、溶け出したそれを封筒へ垂らす。押し潰すように押し付けたスタンプが、最早彼の象徴となつている、あのキャラクターの顔を浮き上がらせた。

十 十 十

翌朝。五人は急いでいた。中には非番の者もいたが、示し合わずこともなく同じ場所——長年過ごしている警視庁はSTラボへ向かつて走っている。五人の気持ちはひとつだ。とてもひとりでは受け止められない衝撃を何とかいなしたくて、恐らく同じ状況下へ置かれているだろう同僚へ会えるはずと踏んで息せき切っている。

早朝の時間指定で届いた封筒。差出人の名を見るまでもない真つ赤な封蝋からは身支度や朝食の時間を削つても読まずには居られないようなただならぬものを感じさせたし、事実その内容を認めた五人は着のまま家を飛び出したほどだ。そのひとり……ST最年少であるプロファイラー・青山は自宅の使用人から受け取った手紙を寝惚け眼で開封し、五分後には呼びつけたドライバーが運転する高級車の後部座席にいた。

「ほんとにありがとう、朝早くにごめんね！」

車内で被ったウィッグを調整しながら、青山はドライバー

ふたつの懺悔室

馳せれば十五年も昔のことだ。同じ日・同じ刻・同じ病院の敷地内で、ふたりの少年は「神」を見た。ひとりとは、治る見込みのない病に伏した母が遂に峠を迎え、せめてもと寝ずの祈りを捧げる庭のマリア像越しに。ひとりは、目の病に侵され光を失い、絶望の内に勉強の道を断念しかけた泣き寝のベッドの病室で。

やがて、ふたりの少年は導かれるようにして出会い、共に神学を修める。そして、青年となった今では同じ教会で神に仕える身となった。

十 十 十

「おい、百合根……そろそろだ」

ミレニアムから十と五年も経とうと云うのに、書庫の壁際に鎮座するのは螺子巻き式の古めかしい大時計だ。そいつの二針がちようどてつべん・深夜零時を指し、ポーン……ポーン……と苦しげに十二度咳き込む間、眼鏡を掛けた若い司祭がこれまた年季の入ったふたつのカンテラへ擦ったマツチで火を灯す。『ほら、』とそれを押し付けられ、軽く頭を下げな

がら受け取ったのは百合根と呼ばれた同じ年頃の司祭だ。彼の方は宵つ張りに少々弱いらしく、さつきからずっと込み上げる欠伸を嘔み殺している。簡素な書庫の文机から見るからに重そうな鍵束をふたつ取り上げると、眼鏡の司祭へ片方を渡してやった。

「そうだね。……池田のところに今日も来るのかな、その……何だっけ」

眼鏡の司祭は池田と云うらしい。

ふたりはそのまま部屋の中央の文机から東西分かれて歩み出した。膨大な書物を収める部屋の天井は高く、広さは徒競走したって良いくらいのものだ。昼間は神学生や礼拝に訪れた信者が慎ましくさざめき合う書庫。しかし人つ子一人居ないここではふたりの歩む黒い革靴の立てる硬質な音や、ほんのちいさな話声さえ遠く響いて。

「ああ、唾（おし）の男のことか？ ……さあな、」

「差別用語だよ、池田」

「他に言葉が無いだろう……お前だって、厄介な客人に気に入られてるようじゃないか」

「……………タロットカードのひと？」

「そうだ。大体、教会の懺悔室に「通い詰める」時点でおかしいのに……毎度毎度雑談して帰っていく信者があるか？」

ふたりそれぞれ部屋の端に辿りつき、重苦しいドアを前に